

困難は分割せよ

2020. 7. 17

「困難は分割せよ」この言葉を聞いて、どのくらいの高校生が反応するだろうか。「ルロイ修道士」と言えば思い出してくれるだろうか。

中学3年生の国語の教科書に『握手』という小説がある。井上ひさしさんの短編小説集「ナイン」にも収められている。この作品に、ルロイ修道士の教えとして「困難は分割せよ」という言葉が出てくる。

物語は、東京の上野にある西洋料理店（精養軒）で、主人公である「わたし」がかつての恩師である「ルロイ修道士」と待ち合わせるころから始まる。わたしはルロイ先生が園長を務める児童養護施設で過ごしていた。ルロイ先生は、故郷であるカナダへ帰国する前に、かつての教え子たちに挨拶をして回っているという。

ルロイ修道士は、かつて施設の子どもたちの間で、「握手をすると2、3日は鉛筆を握れなくなる」と恐れられるほどの力強い握手をすることで知られていたが、久々の再会で差し出された握手には既にその力強さはなかった。

ルロイ修道士は、かつての園児たちの近況を語り、わたしに対してかつて平手打ちをしたことを謝罪する。わたしは、園長から配給された靴下や下着を闇市に売り、園内の鶏舎にいたニワトリを勝手に売りさばくなどして工面した費用で、仙台にあった施設を無断で抜け出して、東京で映画鑑賞と観劇をし、施設に戻ったところでルロイ先生の平手打ちをくらっていた。

わたしは、ルロイ修道士が自身の注文したプレーンオムレツに対し、切る動作をするだけで全く口にしようとしないうところを見て、この挨拶回りが死期を悟ったルロイ修道士の「この世のいとまごい」であると気づく。

案の定、ルロイ修道士は仙台の修道院でこの世を去った。葬式でわたしはルロイ修道士の体が腫瘍の巣になっていたことを知り、無意識にルロイ先生の癖であった指言葉をしてしまう。それは「お前は悪い子だ」を意味する指言葉だった。

このような話である。心に残る作品なので、覚えている生徒も多いことだろう。先日、知り合いの高校国語教員の方からのメールに、ルロイ修道士と「困難は分割せよ」という言葉が出てきた。それで思い出した。そして、考えた。今こそ、ルロイ修道士の言葉が生きてくるときである。次から次へと目の前に現れる問題をひとつひとつ解決していく。まさしく「困難は分割せよ」である。

この言葉は、フランスの哲学者であるデカルトの言葉でもある。この世の中で、この言葉を最も実践した人のひとりにビル・ゲイツがいる。彼は、「問題を切り分けろ」と言っている。新型コロナウイルスだけではない。大雨、台風そして地震などの自然災害、経済問題、政治問題など、我々の眼前には容赦なく困難が迫ってくる。それでも逃げるわけにはいかない。前に進むしかない。

私の場合は、昔から仕事など困難なことが一度に押し寄せてくると、決まって心の中で「ひとつ、ひとつ」と言い聞かせてきた。誰に教わったわけでもない。自然と身に付いていた術である。どんなに多くの困難があったとしても、ひとつひとつ解決していけば、そのうちに終わる。もうだめだと思っても、本当にだめだったことは一度もない。だから、こうして教員を続けている。

「困難は分割せよ」若い皆さん、ルロイ修道士の言葉を胸に、力強く一步一步前に進んでいこうではないか。